

秘密



——ガダルカナルの蛇や、まだそこにおんのか。はよ去ね、おれの胸なぞほうても肋骨ばかりでつまらなかる。はよう行かんか、今度は四時の方向で銃声じゃ、じきに火炎放射がくるぞ。焼かれて死ぬるは苦しいぞ。

でも、まだおるなら、おれのふるさとの話を聞いてくれ。秘密の話を聞いてくれ。

昭和六年の夏、おれがまだ尋常科（尋常小学校）の五年生で十二歳やったころのことや。おれは学校でえらいばかにされとった。なんせ気が弱いうえに、緊張しいで。

しょんべんは、月に二、三回もらすんはあたりまえ。教室の腰かけにくくりつけた座布団をぬらして、先生にげんこつ食ろうとった。近所づてにそれを聞いたオカンにも、

作 黒川裕子
絵 北沢優子

またかいなど叱り飛ばされて。若い女の先生に川で猿股をきれいにしてもろたんも、はずかしゅうてな。

でもなんでやるなア、怒られる、はずかしい、そう思うたら、よけいに栓が抜けよる。

また屁エもひどかった。農村不況ゆうて、田舎の百姓でも食うもんに困つとったような時分での。米麦百姓やうちも、麦飯、甘藷さつまいもやら大根やら、筋の多い食いもんしかなかつたせいか、屁エが出て、出て。

授業の最中でも、朝礼でも、すぐに屁エ。退出ラッパの吹奏に合わせて、また屁エ。おれがわざと屁で邪魔をしとるのやないかと思つた氣イの強い上級生にこづき回されてな。アホかい、そんな器用に屁が出るかエ。

そんなおれが、やつとほつとできたんが、下校の時間や